

施餓鬼会祭文

維れ平成二十九年今月今日、東方山安養寺の盂蘭盆会、施餓

鬼会を営む。茲に近江の国、湖南栗東市の安養寺は天平の昔いにしえ

より古刹にして東方山復の佳嚴は常に微妙の瑞相を示し、瑞雲恒

に掩おぶって靈光永とこしなえに輝き渡る。是これまさに觀音示現の梵刹、

優留曼荼の聖地なり。熊谷俊亮任職は当山に晋住しんじゆうされ、寺門の

復興ふんこつさいしんに粉骨碎身の活動に励まれ、いま、その淨業は偉容華麗にし

て、境内の美しさ、莊嚴さは完成の秋を迎えんとし、藥師堂、觀

音堂の薨いらかは真夏の烈日に映えて燦爛たり。

熱烈たる当山守護の念に燃ゆる檀信徒ここに歡喜あいつどして相集うあ

りて、俊亮任職の教化きょうけに浴する。本日もご詠歌大師流慈苑講山下

登美宗大梵詠講中の面々、恭しく現前の清衆せいしゅうを率いて本尊觀世

音菩薩の宝前に奉詠す。即ち普く恒沙の功德を施し、四來しらいの群

類を救わんものなり。伏おもんして以おもんみれば施餓鬼といふば、釈尊しゃくそん在世の砌みぎり十大弟子の筆

頭にして、豊かな智慧者で神通第一と称されし目連尊者あり。そ

の目連尊者の母が餓鬼道におち入り苦しむ母を救う故事から始ま

り脈々みやくみやくとそのご利益が伝えられお盆施餓鬼の行事伝承に至る。

せいたいによ

目連尊者の母、名を精提女せいたいによといいし者、物を惜しみ、例えば日

とぐち

照りに渴きをおぼえ、一杯の水を求めて戸口に立つ僧侶りんしよくに対して水

りんしよく

を与えず追ひ払う。自からの欲望を満たす吝嗇家とぐちなり。さらに我が

ひごう

子を可愛がるも他人の子は邪見ひごうに扱あつかう非業ひごうさで欲をむさぼり慳貪けんどん

けんどん

むさい とういん

無際之業因むさい とういんに依よつて死後、餓鬼飢饉之苦果ききん くかへと墮おちる。地獄とは

ききん くか

かせん

しょうりん

じゆか

ばんけん

即ち少林之樹果しょうりん じゆか ばんけんも万劍ばんけんとなつて身を切りきざむ。河川の水も火焰かせん かえんと

かせん

かえん

こが

くげん

なつて己の胸を焦こがす。この非の苦患の悲しみ、苦しみを見て目連尊

ていきゆう

えいじ

者は大声で啼泣ていきゆう、泣きさけぶ。その姿はあたかも嬰兒えいじの如し。

つうりき

じんつうりき

目連尊者のはかりしれない人智を越える飛行通力つうりき じんつうりき、神通力をもつ

ごじょうとくどう

かんとく

かな

としても及び難し。悟聲徳道の感徳ごじょうとくどう かんとく かなをも叶ない難し。

こうむ

もう

さんご

これによつて釈迦如来の教えを蒙こうむつて種々の妙薬もうを儲たくわへ、三五の

あした かん

みみよう

きようぐ

きゆうしゆん

ささ

じし

まなつ

朝あした かんに坎かんず、微妙みみようの供具きようぐを九旬きゆうしゆんの夕ささべに捧たげて、自恣じし即ち真夏まなつの

そうりよ

インドにおける室内での修行そうりよに励むむ僧侶並びびに一切の三宝さんごに布施せいたいによ。

せいたいによ

供養こうようを行う。さすれば時を待たずして目連尊者の悲母せいたいによ・精提女せいたいによは

たちま

くげん

まぬが

みみよう

けらく

忽たちまちにして地獄界くげんの苦患まぬがから免まぬれ、速すみやかに微妙みみようの快樂けらくを得たま

う。

こうおん

目連尊者こうおん独ひとりり一世こうおんの厚恩こうおんに報こたへざるのみに非あらず。亦また流た來ら生い死しの群類ま

またるらいしじょうじ

同じく一法性いちほつしょうの直路じきろに入り、ともに三菩提さんぼだいの覚位かくいを証しょうす。

さればこの施餓鬼会くりきの功力くりきを受け一層の仏果ぶつこを示したもつて円通えんつうを証しょうされんことを

乃至法界 平等利益

平成二十九年八月六日

京都府向日市寺戸町

亀光庵

土口哲光

敬白